「この子らを世の光に」

某大学の教師W氏が「劣悪遺伝の人は子を産むな」と提言したが賛否両極に分かれている。ホンネをよくぞいってくれたとする者。それは「悪魔の思想」だという者。

問題が大きくなったのはW氏が本を書いて、自らを「知的生活」者として売り出していることにも原因があろう。しかし、彼が遺伝学には無知であることが専門家から指摘されだしたから、影響は相当減殺されたようだ。

でも彼はいう。障がい者が生まれ、「助けてもらわねばならない人が多ければ、社会の程度は著しく低くなる」「福祉が他人の労働を食いつぶしている」と。

私は孫と共に読んだ「クリスマス・キャロル」の中の作家ディッケンズの言葉を、さやかに思い出す。「どんな人が生きてよいか、どんな人間が死んでよいかそれをなんできめられよう」と、人生に涙し真実を歩んだ経験のある人なら、その言葉をしみじみと理解でき、生きる勇気を汲(く)み出すこともあろう。

私も他人の労働を食いつぶしている方で恐縮だが、「食う」よりは「食われる」こ

とをこい願っている。それが人間の本当の願いであろう。彼は「助けてもらわねばならない人」は世の重荷という。人は一人では生きられない。助けられて存在できる。彼は助けるだけで助けられることはないといいたいらしい。人みなが助け助けられる社会、だから生きるに値するのだ。

私の昔の教え子に三十五年寝たきりの婦人がいる。見舞った旧友は帰り際にいうらしい。「私はあなたに生きる勇気を与えられた」と。助けられている生活を表面だけ見てはならない。

日本福祉史上輝いている糸賀一雄は、知恵遅れの子らに教えられていう。「この子らに世の温かい光をというのではない。この子らこそ世の光なのだ」と。

ディッケンズは、W氏と似たようなことをいったあの童話の主人公スクルージに最後にこういわしていた。—ああ、何と恐ろしいことを私はいったのだろう。

（一九八〇年十一月二十八日）